

「薄雲女院」に見る源氏物語注釈

波多野, 真理子
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/9401>

出版情報 : 語文研究. 84, pp.16-27, 1997-12-25. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

「薄雲女院」に見る源氏物語注釈

波多野 真理子

女院又式部卿宮の御ために源のめし給也

(休・薄雲157)

女院又式部卿宮の御ために源氏のめし給へり

(紹・薄雲)

とあるごとくである。

ところが、ここに、

・はれくしからて(六一五・6)

入道宮の御もうきにて内へ参り給さりし事也

(休・薄雲95)

薄雲の御不例故無案内をなり(紹・薄雲)

・こ宮のおはし(一〇八二・8)

こ入道宮の御事也(休・若菜上382)

卅七にてなりこ宮とあるもうす雲の御事の

(紹・若菜上)

と、注釈箇所は同じであっても、同じ人物のことを言うのに

一

『紹巴抄』は、従来その奥書から、三条西公条による『源氏物語』講釈を連歌師紹巴が聞書し、それを基に成った『源氏物語』の注釈書であると考えられてきたが、近年、井爪康之氏により、その奥書は、紹巴が自書の権威付けのために付したものであり、実際は紹巴の連歌の師であった里村昌休の『休閒抄』を資料に作成されたものであるという説が提出された。確かに、『紹巴抄』は、『休閒抄』と重なる部分もかなり多い。例えば、

・いのちのかきり(六一四・14)₂

うす雲の御心也(休・薄雲90)₃

薄雲の御心(紹・薄雲)₁

・にひ色(六二五・12)

『紹巴抄』と『休閒抄』では異なる言い方をしているところがある。『紹巴抄』では「薄雲」とあるところが『休閒抄』では「入道宮」。特に、「こ宮のおはし」（若菜上一〇八二・八）などは、注記内容はもとより、表現までほぼ同じであるのに、人物の表現法だけが異なっている。同じ部分の注釈であるのに、同じ人物を表すのに異なる呼称でもってしているのである。両書の密接な関係を考えるに、これはどうしたことかから起こったのであろうか。

二

まず、先の『紹巴抄』に見た「薄雲」という呼称から考えてみよう。これは、次に見るように、薄雲巻における光源氏の藤壺に対する哀傷歌に由来する。

・ 入り日さす嶺にたなひく（六一八・八） 此哥をもて巻の名とす又薄雲の女院共申也色やまかへるとは雲も物をおもふにやとのよし也
（『一葉抄』薄雲63）

・ この巻を薄雲といふことは、薄雲の女院かくれさせ給ひて後、源氏、

入り日さす峰にただよふ薄雲は物思ふ袖の色にまがへる

この歌の心は……（中略）……夕暮れの薄雲、薄墨なるやうにて、わが袖の色にまがひければ、よみ給ひしゆゑ、

薄雲の巻とは申し、この女院をも薄雲の女院と申しつけたり。
（『源氏小鏡』薄雲⁶³）

しかし、この藤壺に対する「薄雲」という呼称は、『源氏物語』本文の中では全く使われていない。物語の中では、藤壺は「藤壺（中宮）」「入道の宮」などと呼ばれているだけである。ただ、中世の『源氏物語』の受容世界では、「薄雲」というのもまた普通に用いられていた呼称であった。

源氏物語受容史の中で、固有名詞的な人物呼称の定着に大きな影響を及ぼしたものの一つに、鎌倉初期頃の成立と考えられている「源氏物語古系図」がある。

薄雲女院 きさいはらの四宮 桐壺の巻に内にまいる給て藤壺ときこえき……⁽⁶⁾

ここで、藤壺は「薄雲女院」という固有名詞を与えられている。そして、次にもあるように、藤壺を表すのに「薄雲（女院）」というのは決して珍しくないのである。

・ 『親清五女集』（二六八）⁽⁷⁾
源氏の人の名をだいにて人人歌よみ侍りしに

うす雲の女院

身にかへて春のみやこのはなざかりかぜのどかにとさ

ぞいのりけん

・ 『実材母集』（四二二）

うす雲の女院

から人のふかきおもひの色そへてたちまふ袖もあはれ

とやみし

・『風葉和歌集』巻第三(一九七)

御返し

薄雲の女院

袖ぬるる露のゆかりと思ふにもなほ疎まれぬやまとな
でしこ

・『源氏物語歌合』

作者

左

右

きりつばの御門

朝がほの齋院

朱雀院

おほ宮

冷泉院

あかしの中宮

六条院

六条の御息所

うす雲の女院

秋このむ中宮

ほたる兵部卿宮

玉かづらの内侍督

(以下略)

では、注釈書の世界ではどうか。中世初期の代表的注
釈書である『河海抄』『花鳥余情』『弄花抄』を通覧してみ
ると、それらでは藤壺を言うのに、賢木巻途中まではほぼ一貫
して「藤壺」が使われ、その後源氏の雲林院参詣の場面から
「中宮」が、須磨く滯標巻では「藤壺」「薄雲」が混じってい
るものの、中でも「入道宮」が優勢を示している。そして、
ようやく蓬生・絵合巻から「薄雲」と言われ始めるのである。
そして、その傾向は『細流抄』や『孟津抄』においても変わ

らず、絵合巻以降、「薄雲」以外の名で藤壺が呼ばれることは
ない。

三

ここで、各注釈書において、いったい注釈のどのあたりか
ら「薄雲」という呼称が固定されてくるのか、確かめておき
たい。

『弄花抄』では、先述したように須磨く滯標巻の間では「入
道宮」「藤壺」「薄雲」が混在し、絵合巻から「薄雲」で統一
されてくる。須磨巻から「入道宮」という呼称が優勢になっ
てくるのは、それが物語の中で藤壺の呼称として使われ始め
るからに他ならない。

入道の宮よりも、ものの聞こえやまたいかがりなされ
むと、わが御ためつつましけれど、忍びつつ御とぶらひ
常にあり。(須磨三九六・七)

この物語本文に対する各注釈書の注は次のようである。

・藤壺宮爰より入道宮と云男女通して入道と号す

(『弄花抄』須磨5)

・藤壺の事也こゝにはしめて入道と云也男女にかよひて入
道の号はある也

(『細流抄』須磨8)

他の書も言うところはほとんど変わらない。これらからも分
かるとおり、須磨巻冒頭部で、物語としてはじめて藤壺のこ

とを「入道宮」と呼ぶようになり、注釈書でもそれに応じて「入道宮」の呼称を用いるようになるのである。

ただ、物語では比較的多用される「入道宮」が、注釈されるにあたって、「藤壺」「薄雲」が混じるような不安定なものであるのは、この須磨・瀧標巻間の物語で明石入道が大きな位置を占めているからであろうと考えられる。つまり、明石入道について注記する場合、「入道」とするのが普通なのである。先の注釈に見えるように、「入道」は男女両方に用いることのできる呼び名である。しかし、だからといって藤壺が「入道宮」、明石入道が「入道」では、紛らわしい限りであり、誤りのもとともなる。従って、明石入道は「入道」、それに対して藤壺は別の呼び名で呼ぶ方法が選択されたのではないかと思われるのである。実際、須磨・瀧標巻で明石入道が登場している間の注釈で藤壺に言及する場合、藤壺を「入道宮」と呼ぶ注記はほとんどない。

また、蓬生・絵合巻、特に絵合巻以降、藤壺に対する「薄雲」の呼び名が定着するのも頷けるものである。絵合巻というのは秋好中宮の入内から物語が始まる。

前齋宮の御参りのこと、中宮の御ころこに入れてもよほしきこえたまふ、こまかなる御とぶらひまで、とり立てたる御後見もなしと思しやれど、大殿は、院に聞こしめさむことを憚りたまひて、ただ知らず顔にもてなしたまへれど、おほかたの事どもはとりもちて、親めききこ

えたまふ。

(絵合五五七・1)

時代は冷泉帝の御代。既に瀧標巻で代替わりがあったが、本格的に冷泉帝の時代に関することが語られるのは、絵合巻からである。しかし、先の物語本文中の「中宮」というのは冷泉帝の後のことではなく、その母である藤壺のことを指している。

・うす雲 一勘也中宮にてまし／＼ける故にかくかける也

(『弄花抄』絵合2)

・薄雲也御出家の後なれとも只今別に中宮なしさてまきれなきゆへにかくかける也薄雲の御心此入内の事……

(『細流抄』絵合2)

ここで『細流抄』が「まきれなきゆへにかくかける」と、指摘しているように、この場面での中宮は確かに藤壺ではあるが、帝が冷泉帝であることが明らかにならな、やはり物語を読む側にとってみれば、この「中宮」が誰であるのか紛らわしいことなのである。この部分、ほとんどの注釈書が中宮を藤壺に同定する注釈を行っている。しかし、物語の中では、この巻で「入道宮」という呼び方はなされていない。といって「梅壺」の女御を擁す冷泉帝後宮に対して「藤壺」というのもおかしいものである。「藤壺」というのは後宮の飛香舎の別名であり、同時に、そこに居所を与えられた女性をも指す言葉である。桐壺帝が讓位した葵巻以降、「藤壺」に住んでいない藤壺は、ここでは「藤壺」ではないのである。また、藤壺に

は「薄雲女院」というはつきりした呼称が一方で通用しているのであるから、呼称の由来がある薄雲巻からに限ることなく、固有名詞的な通称として早くも絵合巻あたりから「薄雲」が用いられたと考えることができるように思われる。以降、藤壺は「薄雲（女院）」として定着する。

では、『細流抄』の場合にはどうなのか。

人しれぬ御心つから（三八七・一）

人しれぬ物おもはしきとは源の心臘月夜藤壺の事に
不断心をつくし給也（花散里一）

宮もみなおほし（四〇八・五）これは藤壺也（須磨96）

見しはなく（四〇八・9）

藤壺の御哥一の句は故院二の句は源也（須磨98）

わうみやうふを（四一〇・4）

藤壺の御かはりにこれは可然人なりとて春宮にそへ
給ふ人也（須磨108）

宮には（四一四・14）薄雲女院也（須磨140）

とし比はたゝものゝ（四一六・9）

薄雲の御心の中也（須磨154）

あはれにも恋しうも（四一七・1）

草子地ことはる也かやうなるゆへに薄雲も源をあは
れにおほすへきと也（須磨159）

いさゝかなるものゝむくひ（四四五・9）

薄雲密通などの事なるへき歎又さならてもあるへし

入道の宮はいとをしう（四九九・一）

兵部卿宮は薄雲の御兄弟也

（濡標147）

「藤壺」から「薄雲」に変わる須磨巻の箇所である。そのきっかけは、用語は異なっているが、『花鳥余情』で「藤つほの中宮」から「入道の宮」に変わる境目と一致していることと、何らかの関連があるようにも思われる。『花鳥余情』は『河海抄』同様、以降に成立する注釈書が重要視してその注記の多くを自書に取り込んだものであり、その影響は無視できないものである。また、その境界となる部分が、物語においても一つの転換点であることも関わりがあるかもしれない。光源氏が須磨に下向する前、藤壺と別れの挨拶を交わす場面までは「藤壺」と呼ばれているのであるが、それが「藤壺」と呼ばれる最後であり、次に藤壺のことに筆が割かれる場面は、源氏は既に須磨に滞在しており、その時には藤壺は「薄雲」と注記されるのである。光源氏と藤壺の関係の変化を実隆が読みとり、それが呼称の選択にも表れたのか。

ただ、『細流抄』が先の先行注釈書とは異なっているのは、「藤壺」から「薄雲女院」に変わる間に「入道宮」という呼称が出てこないことである。例えば、須磨下向にあたり、亡き桐壺院の御陵参りをする場面で源氏が詠んだ歌「なきかげやいかが見るらむよそへつつながむる月も雲がくれぬる」（須磨四一〇・3）についての各書の注記を見てみると、

（明石31）

……入道の宮密通の事を心の鬼におもひ給なるへし

〔「一葉抄」須磨56〕

……入道宮密通の事思給成へし〔「弄花抄」須磨44〕

……藤壺の密通事を思給なるへし〔「細流抄」須磨107〕

……入道の宮密通の事也思給なるへし云々〔「弄」〕

〔「孟津抄」須磨152〕

となっており、注記内容は先行注釈書とさほど変わらないにもかかわらず、わざわざ「入道宮」を「藤壺」と言い換えているのである。

つまり、『細流抄』では藤壺に関する呼称の変遷が、「藤壺(中宮)」↓「薄雲(女院)」と図式化できるほど、他の注釈書に比べて複雑さがなくなり、呼称の統一が見られる。濔標巻末でただ二例「入道の宮の御心也」(細267)「入道の宮也」(細269)というのが見えるが、それ以外は須磨巻で源氏が須磨に下向して以降は藤壺は一貫して「薄雲(女院)」と呼ばれるのである。この傾向が「明星抄」でも『細流抄』とほとんど一致して見られることから、それが決してその場限りのものだったのではなく、ある程度意識して行われたことだと言えるのではないだろうか。

しかし、そもそも、「薄雲」という呼称の由来は、薄雲巻における光源氏の哀傷歌「入日さす」の歌であった。それからすると、薄雲巻以降に「薄雲女院」と呼ばれることになるのが自然であるように思われる。実際、それを意識している注

釈書もある。『孟津抄』である。薄雲巻で藤壺についての注記がある部分(注記については藤壺の呼称のみ)を一部見てみよう。

115 内のおとゝのみなむ(六一四・九) 藤つは

126 宮いとくるしうて(六一五・10) 藤

127 たかきすくせのさかへもならふ人なく

(六一五・12) 女院

143 心ふかき事とものかきり(六一七・14) 女院

152 この入道の宮の御母後の御世より……

(六一八・10) 薄雲

226 つゐに心もとけすむすほゝれて……

(六一六・10) 薄雲女院

261 これはいとにけなきことなり……

(六一九・13) 薄雲

こうしてみるとわかるように、『孟津抄』の薄雲巻では、はじめはまず「藤壺(藤)」、次に「女院」と呼び、「五二番より後は「薄雲(女院)」と呼ぶようになるのである。そして、「藤壺」から「薄雲」に代わるきっかけは、実は一四九番に見えている。

149 入日さす峯にたなひくうす雲は物思ふ袖に色やまか

へる(六一八・8)

源哥也これにて巻の名になる也

私 これより薄雲女院と号す此以前に諸抄いつ

れも薄雲と注すいひつけたれはなるへし

『孟津抄』の「私注」は、編者九条植通の説を意味するが、それによると、まず薄雲巻と「薄雲女院」という呼称の由来を示し、それから、「此以前に諸抄いづれも薄雲と注す」と、『孟津抄』に先行する注釈書が、薄雲巻以前の巻から既に藤壺に対して「薄雲」という呼称を用いるが、それは「いひつけ」ているから、つまり、人物名として言い慣れているからであるという。そうした先行注釈書に対して、『孟津抄』は、この「入日さす」の歌から藤壺は「薄雲（女院）」と呼ぶべきなのだという意識を持っていると思われる。以降、幻巻に至るまで、先行注釈書からの引用は別として、藤壺は一貫して「薄雲」と呼ばれる。『孟津抄』には、先行する『弄花抄』や『細流抄』とは異なり、人物の呼称をその由来となった物語の部分に忠実に反映させようとする姿勢が見えると言えよう。

四

実隆の孫である九条植通の編んだ『孟津抄』や、三条西家の源氏学を集大成したものと言われる中院通勝の『岷江入楚』においても、先行注釈書からの引用を除けば、明石巻以降は一貫して藤壺を「薄雲」と言う。では、はじめに問題にした連歌師による注釈書ではどうなっているのだろうか。宗祇から、肖柏を経て実隆に至る三条西家の源氏学に対して、

宗祇から宗長・宗牧、里村昌休へと受け継がれていく地下の連歌師による源氏学である。

基本的には、『休閒抄』でも前半は藤壺は「藤壺」と呼ばれ、後半、つまり蓬生巻以降「薄雲」が優勢になる。それは、これまで見てきた三条西家の諸注釈書とあまり変わりがないようであるが、大きく異なっているのが「入道宮」という呼び方が薄雲巻以降、若菜上巻になっても使われていることである。先の諸注釈書においては、「入道宮」というのは賢木巻の最後から濡標巻までに限られており、少なくとも絵合巻以降はどの書も藤壺は「薄雲」としか呼ばれていなかった。ところが、『休閒抄』では薄雲巻以降も「薄雲」以外の呼称である「入道宮」が六例を数えるのである。

a いとわかくさかりに(六一五・5)

入道宮を御門のみ給心也 (薄雲94)

b はれくしからて(六一五・6)

入道宮の御もうきにて内へ参り給さりし事也 (薄雲95)

c かしこき御身の(六一七・7)

入道宮の事也 (薄雲110)

d こ宮にも(六一八・11)

入道の宮也 (薄雲119)

e 君こそはさはいへと(六五五・10) 紫上は女院の御め
いなれはゆかりこよなからすと也花 私云さは

いへとは入道の宮についれも不及然共紫上は
似ぬると云義歟又少物ねたみの事に紫上の事を
いへる心にてさはいへとも云るにや弄(朝顔146)

f 此宮のおはし(一〇八二・8)

(若菜上382)

これらのうち a b d については先行の書には注釈がなく、昌
休の独自注であると言えよう。では、その他はどうか。

c 是より薄雲の行跡を云り

(細・薄雲101)

e 紫のうへは女院の御めいなれはゆかりこよなからすと
なり

(花・朝顔46)

こよなきハすくれたる也こよなからすハけんかくにな
き心也薄雲と紫上とおなしやうなるとの給也さハいへ
とハ薄雲をたくひなしといへ共と也わつらハしきけ
そひてかとくしさとハえんしのことをの給也

(一・薄雲92)

紫上の御ため薄雲はおは也さて紫上のゆへとは云り

(細・薄雲156)

* 『弄花抄』には、この部分の注記なし

(細・若菜上343)

f 薄雲也

他の注釈書では、やはり、これらの部分すべて「薄雲」とし
ている。先行の注釈といっても、『休閒抄』がそのままそれら
の本文を引き写しているものはないので、それらの直接的な
影響をここから読みとることは難しいが、反面、昌休による

独自の注であるとも断定できない。しかし、いづれにしろ、
a ~ f の注において、昌休は藤壺のことを「入道宮」といい、
その言い方は薄雲巻以降、他の注釈書では見られないことな
のである。

では、『休閒抄』は、なぜ先行注釈書がする「薄雲」ではな
く、「入道宮」という呼称を用いているのか。例えば、f の場
合を見てみよう。物語の本文はこうである。

「故入道の宮おはせましかば、かかる御賀など、我こそ進
み仕うまつらましか、何ごとにつけてかは心ざしをも見
えたてまつりけん」と、飽かず口惜しくのみ思ひ出で
こえたまふ。

内裏にも、故宮のおはしまさぬことを、何ごとにもは
えなくさうざうしく思さるるに、この院の御ことをだ
に、例の、跡あるさまのかしこまりを尽くしても見え
たてまつらぬ……

傍線部の部分に対する注が f であるが、その数行前に「故入
道の宮」とある。そこにも各書、注記するが、

・薄雲三七にてかくれ給 (一・若菜上231)

・薄雲也 (細・若菜上342)

と、藤壺のことを「薄雲」と言う。一方、『休閒抄』はこの
「故入道の宮」に関しては何も触れていないが、f の「故宮」
に至って、それは「此入道宮の御事也」と、「薄雲」ではなく、
本文の直前に出てきた「故入道の宮」でもって、その人物が

誰だか示し、説明しているのである。

つまり、『休閒抄』では、藤壺のことを、薄雲巻以降も全て「薄雲」でもって言い換えることはせず、物語本文中の語句を用いている。それは注釈作業のごく自然なことであり、そこには、物語を読んでいく上で文意の理解に役立てばそれでよしとするような姿勢が見えるといつてよいのではないだろうか。それに比べて、当時一応、藤壺の固有名詞として知られていたであろうが、それでも物語の中では一度も出てこない人物名称「薄雲」でもって、物語後半、つまり絵合巻以降、一貫して呼び続けるという、三条西家の方法は意識的なやり方と感ぜられるのである。⁽¹²⁾

そして、三条西家と緊密な関わりを持つとしたと言われる紹巴は、こうした部分で、師の『休閒抄』をそのまま継承するのではなく、公条の講釈の影響もあつたのだろう、三条西家の方法を取り入れるように思われる。

b 薄雲の御不例故無案内をなり（薄雲）

(休) 入道宮の御もうきにて内へ参り給さりし事也

e ous雲無双也さはいへと紫御めいにておはします間おとり給はしとにや物えんし也といはんためなるへし

(朝顔)

(休) 紫上は女院の御めいなれはゆかりこよなからすと也花 私云さはいへととは入道の宮

についれも不自然紫上は似ぬると云義歟
又少物ねたみの事に紫上の事をいへる心に
てさはいへとも云るにや弄

(細) 紫上の御ため薄雲はおは也さて紫上のゆへとは云り

f 卅七にてなりこ宮とあるもうす雲の御事の (若菜上)

(休) 入道宮の御事も

(細) 薄雲也

(孟) 冷の薄雲をおほし出玉ふ也

同じ箇所注釈をもつ他の注釈書の注記を参考までに挙げたが、『休閒抄』以外は前述の通り、絵合巻以降の朝顔・若菜上巻で、藤壺は「薄雲」と言われている。それらの『紹巴抄』への、この部分における直接的な影響は定かにはできないが、少なくとも成立事情からして、この部分だけ『休閒抄』を参考にしていないとは考えられない。それにもかかわらず、物語本文を基に、藤壺を「入道宮」とする『休閒抄』の注記は直接採用せず、三条西家の注釈に見える「薄雲」という言い方を採用しているのである。

『休閒抄』とは異なり、『紹巴抄』も絵合巻以降は、三条西家の注釈と同様、藤壺のことを一貫して「薄雲」と呼ぶ。自書が三条西公条の講釈聞書を基に作成されたということと、奥書に明記し、公条との密接な繋がりを世間に示そうとした紹巴と、あくまで若年の連歌門人のための指導を目指し、その

ために注釈を成した昌休。「薄雲」と「入道宮」という人物表記に見られる差異の一端からも、二人の『源氏物語』講釈に対する姿勢や注釈意識の違い、そして三条西家における注釈方法の影響の過多がそこには見えるように思われる。『紹巴抄』は、昌休の『休閒抄』を基に、そこに自説や公案説を書き加えて成ったものと言われるが、その改訂は単なる『休閒抄』の焼き直しや公案講釈聞書の装いによるだけなのではなく、ここに見てきたような人物呼称の書き換えという点からではあるが、より積極的な三条西家の学問の取り込みが現れていると思われるのである。

では、連歌師昌休と、紹巴が影響を受けた三条西家の注釈意識の違いとは何か。三条西実隆は古今伝授を宗祇から相伝され、当代一の文化人として高い評価を受けていた人物である。また、古今伝授だけでなく、『源氏物語』に関しても、実隆は宗祇、肖柏の源氏学の影響下にあった。そして、三条西家は、芳賀幸四郎氏の言葉を借りれば、「当時における最高の和学教室であり、文運護持の中心道場であった」¹³⁾が、当時の公家社会は何より先例重視の世界である。学問もその影響を免れない。注釈内容は、学問の深まりとともに当然変化していく流動的なものであるが、人物の呼称という、より単一のもので固定しようとする傾向にあるものにおいては、「古系図」などをはじめとする伝統ある先学を踏襲しようとするのに何の不思議もない。

一方、昌休が想定する『休閒抄』の受容者は連歌の弟子たちであった。連歌師にとって『源氏物語』は単なる必須教養としての学問ではなく、連歌を作る上での教養を養う上で必要なものである。まずは物語の内容を把握することが主要な目的であって、いわゆる学問として注釈する必要はない。木藤才蔵氏によれば、昌休は幼い頃、実隆邸で公家的教養を学んだとされるが、長じてから作成された『休閒抄』は、三条西家の源氏学ではなく、宗碩、宗牧といった直接の連歌の師による源氏学の影響が色濃い。¹⁴⁾あくまで昌休自らの属する狭い連歌師の世界を対象として『休閒抄』は作られたと思われるのである。

〈注〉

- (1) 「休閒抄から紹巴抄へ」(『源氏物語注釈史の研究』新典社、平5)
- (2) 数字は『源氏物語大成』の頁行数。
- (3) 『源氏物語』の注釈書は、断りのない限り『源氏物語古注集成』(おうふう)に依る。
- (4) 無刊記版本『源氏物語抄』による。
- (5) 『源氏小鏡 高井家本』教育出版センター、昭53。
- (6) 九条本(『源氏物語大成』資料編)。為氏本、正嘉本とも同じ。
- (7) 『新編国歌大観』
- (8) 本文は日本古典文学全集(小学館)による。
- (9) 『河海抄』明石

なにかし延喜の御手よりひきつたへたること三代になん成侍ぬるを

……心にくゝねたきねは入道宮の御ことこのねにもまされりと云々……

(10) ただ、『孟津抄』において薄雲卷一五二番が「薄雲」と注記する初めではない。他の注釈書と同様、蓬生・絵合巻からすでに藤壺のことを「薄雲」と呼んでいるし、明石・薄標巻にも数回その名は見えている。

(1) 先帝の四宮の御かたちすくれ給へる(桐壺二一・二) 薄雲也

(2) いとあるましきことこれはたゝいさゝかなる物のむくひ也(明石四四五・9)

薄雲密通などのことなるへき歎又さならても云々これより先帝夢中の御詞也

(3) 入道の宮御くらゐを又あらため給ふへきならねは太上天皇になすらへてみふ給はらせ給(薄標四九八・5)

……東三条院延喜以後の例なれば薄雲女院の尊号は持統天皇の例たる歎……

(4) 入道の宮はいとおしうほいなき事にみたまつり給へり(薄標四九九・1) 薄雲の御心に源と兵部卿宮と不快を思ひ給ふ也

これらがその例であるが、(1)は『孟津抄』における藤壺に対する一番初めの注であり、「薄雲」が藤壺の通称として最も通用していたものであることの現れであろう。また、(2)(3)(4)の三例には先例がある。

(2) 薄雲密通などの事可成歎又さなくとも也(弄・明石17)

(3) ……いまのうす雲の尊号は專持統天皇の例たる歎……(河・卷七・薄雲)

(4) 兵部卿宮は薄雲の御兄弟也(細・薄標147)

(4) は全く同じ注記ではないので、『孟津抄』がこの箇所では「細流抄」を意識していたかどうかは定かではないが、(2)(3)はそれぞれ『弄花抄』『河海抄』をそのまま引いていることは明らかである。さらに、須磨・明石・薄標巻にみる「入道宮」五例も先行注釈書からの引用であることを鑑みれば、薄標巻以前で、藤壺を「入道宮」「薄雲」と言っている『孟津抄』の独自注はなく、すべて「藤壺」もしくは「中宮」である。薄雲卷一四九番で「これより薄雲女院と号す……」

と記してから、はじめて藤壺に対して「薄雲」という名称が用いられるようになり、それ以降はずっと「薄雲」で通ずるのである。

(11) 井爪康之氏によれば、『休閒抄』は若年の宗養以下の門人のための指導を目的とした宗牧の講釈をもとに成ったもので、物語を一通り読むための、啓蒙的な手引書と性格付けられる(『休閒抄の諸本と成立』(『源氏物語注釈史の研究』新典社、平5)。他に「連歌師と源氏物語」(『源氏物語の本文と受容』源氏物語講座8、勉誠社、平4)。

(12) 連歌師能登永閑による『万水一露』において、これも蓬生巻以降多くは、藤壺のことを「薄雲」と呼んでいるが、やはり三条西家のものとは異なり一貫してはいない。朝顔巻では「頌」「閑」といった宗頌、永閑の注において「薄雲」ではなく「中宮」が多出、さらに、若菜上巻においても、『細流抄』

の引用部分は「薄雲」となっているものの、「閑」注では「入道宮」とする注記が二例ある。

(13) 井爪氏、前掲書。

(14) 人物叢書『三条西実隆』吉川弘文館、昭35

(15) 『連歌史論考』下、明治書院、昭46